

平成21年度卒業論文

日本プロ野球1リーグ制導入の妥当性

～観客動員数増加に向けて～

文教大学 情報学部 経営情報学科

A6P21054 栗林 拓也

日本プロ野球1リーグ制導入の妥当性
～観客動員数増加に向けて～

栗林 拓也

研究概要

この論文では、現在のプロ野球球団の人気や観客動員数などを考察した上で、12球団体制、1球団144試合程度、同一カード24試合以内を条件に、どのようにすれば観客動員数を増加させることができるのかを考えた。本論文は、高校野球やWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）等で適用されているトーナメント制度、現在日本プロ野球で実施されている交流戦に注目した。トーナメントでは、長期期間実施されるプロ野球には向かず、短期期間実施されるイベント向きだということがわかった。交流戦と日本シリーズでは、通常の試合よりも観客動員数が多いことがわかった。本研究では、1リーグ制を導入することが観客動員数増加に向けた案として最善であるということに至った。更に、トーナメント制度やリーグ数を変更した場合、多くの制度や案を提案できることがわかった。

目次

第1章	はじめに	p.1
第2章	プロ野球について	p.1
2-1	日本プロ野球とは	
2-2	近年の観客動員数の変化	
第3章	観客動員数増加案	p.2
3-1	トーナメント制度	
3-2	リーグ数の変更	
第4章	1リーグ制	p.5
第5章	まとめと今後の課題	p.7

参考文献

謝辞

日本プロ野球1リーグ制導入の妥当性 ～観客動員数増加に向けて～

栗林 拓也

第1章 はじめに

日本の中で最も人気のあるスポーツは野球といっても過言ではないだろう。2009年春、WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）では優勝し、高校野球の夏の甲子園では、連日満席という大盛況であった。しかし、近年、日本のプロ野球の観客動員数は減少している。球団の消滅、裏金問題、暴力団問題等がその原因として挙げられている。減少した観客動員数を回復するために、1リーグ制の提案も挙げられているが、現実には1リーグ制は導入されていない。

本研究では、観客動員数が減少した点を問題と捉えた。そして、どのようにすれば観客動員数を増加させることができるのか考えた。高校野球やWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）等で適用されているトーナメント制度、現状の2リーグ制からのリーグ数を変更する2つの案を取り上げ、観客動員数を増加する案として適しているかを検証する。検証するにあたり、12球団体制、1球団144試合程度、同一カード24試合以内、実施期間200日程度を条件のもとに話を進めていく。

本論文の構成は次のとおりである。まず、第2章にて、プロ野球の概要、近年の観客動員数を示す。次に第3章で、観客動員数を増加させる案を挙げ、プロ野球に適用でき、観客動員数が増加するか検証していく。第4章にて1リーグ制導入の妥当性を論じる。最後に、第5章にて本研究のまとめと今後の課題を提示したい。

第2章 プロ野球について

この章では近年の観客動員数から日本プロ野球の現状を示す。

2-1 日本プロ野球とは

日本のプロ野球は、社団法人日本野球機構(NPB)傘下のセントラルリーグ(セ・リーグ)、パシフィックリーグ(パ・リーグ)の2リーグ12球団で構成されている。試合を行うことで観客から入場料を徴収し、それを球団の利益や選手の報酬としている。

プロ野球はビジネスであるため、1球団144試合程度は必要である。なぜなら、1球団あたり、選手と監督、コーチ等を含め100人と計算すると、12球団で1200人になる。1200人もの選手への報酬には、多くの観客動員数が必要となるためである。移動費等の面からも

12 球団体制、同一カード 24 試合以内、200 日程度が最適なのである。

2-2 近年の観客動員数の変化

プロ野球は戦後あたりから人気が高まり、この野球人気は長らく続いたが、近年、人気は低迷した。図 1 は 1990 年からの年度別の観客総動員数である。図 1 から 2004 年を境に観客数が減少したことがわかる。この年には、球界再編問題や裏金問題、暴力団問題が発生し、それらが観客動員数減少の主な原因といわれる。球団ごとに様々なイベントを行ったりはしているが、図 1 を見る限り人気を取り戻したとは言えないであろう。

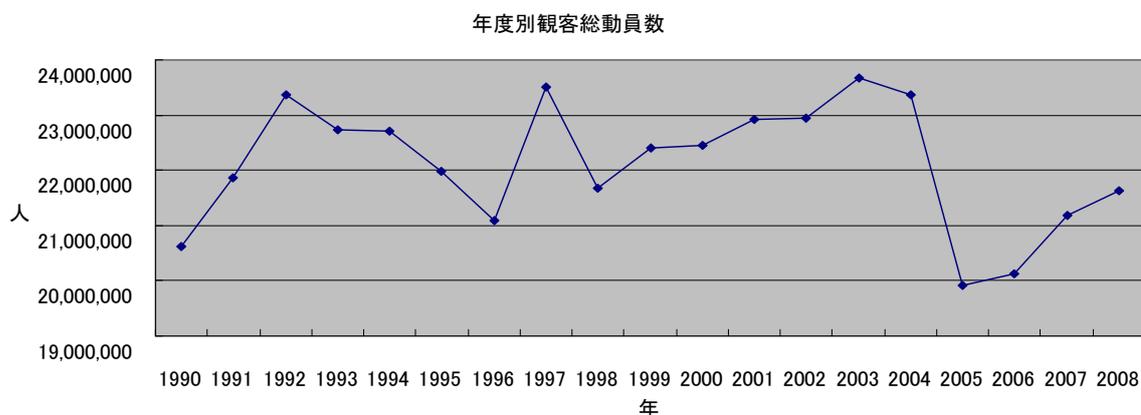


図 1) 近年の観客総動員数の変化 (出典 : [1]~[6])

第 3 章 観客動員数増加案

この章では、第 2 章で示した観客動員数の減少から、12 球団体制、1 球団 144 試合程度、同一カード 24 試合以内を条件に、高校野球や WBC (ワールド・ベースボール・クラシック) で適用されているトーナメント制度と、現状の 2 リーグ制度からのリーグ数変更の案を挙げ、考察する。

3-1 トーナメント制度

トーナメント制度とは、1 対 1 の勝ち抜き戦である。勝負に負けた球団はその時点で脱落し、勝ち者同士で対戦を繰り返しながら勝者を決定する。高校野球や WBC で適用されている。

2009 年度の高校野球、夏の甲子園での 1 試合あたりの観客動員の平均を出し、プロ野球の観客動員数の平均と比較し、グラフにしたのが図 2 である。

1試合あたりの観客動員数の平均

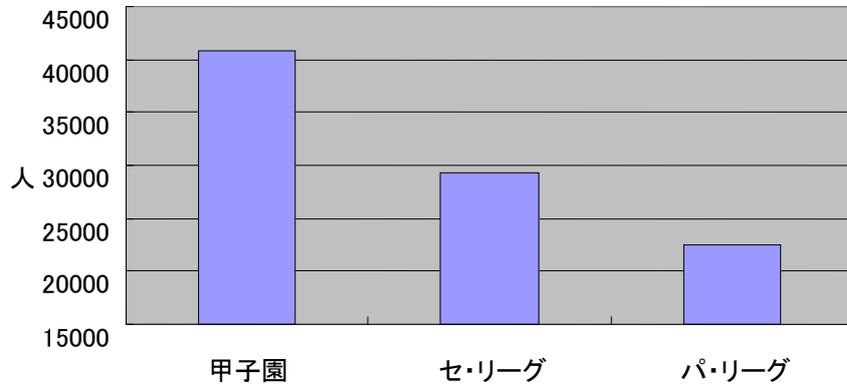


図2) 高校野球とプロ野球の観客動員数の平均 (出典：産経新聞 2009年4月～10月)

図2から、プロ野球よりもトーナメント制度を適用している甲子園での観客動員数が多いことがわかった。よって、プロ野球にトーナメント制度を適用し、観客動員数を増加させる案が思い浮かぶ。

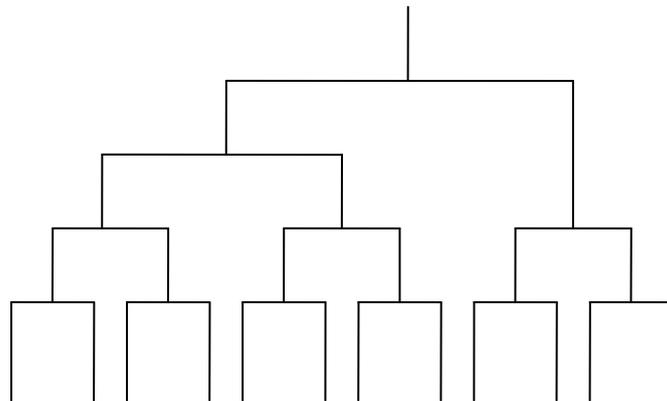


図3) 素朴なトーナメント図

図3は12球団体制でトーナメントを実施する際の素朴なトーナメント図である。問題になるのは、日本シリーズのように4勝ではなく、1勝すれば次の勝者と対戦する形式をとった場合、1球団あたりの平均試合数は1試合で、4日間で終わってしまう。全球団で年間144試合行うには、144回トーナメントを行う必要があり、576日もの日数を課さなければならず、1年間に収まらなくなってしまう。このことから、1試合でトーナメントの勝ち抜けを決めるのではなく、3試合で2勝、5試合で3勝した球団が勝ち進める形式について考えてみる。3試合の場合、12日の日数が課せられ、全球団で年間144試合行うには、同じく576日必要になってしまい、5試合の場合も同様、560日近くの日数が必要になってしま

う。やはり年間 200 日程度の興業には押さえられない。ここで高校野球にはなく、WBC で適用されているダブルエリミネーション方式を取り入れてみる。ダブルエリミネーション方式とは、2 敗した時点でトーナメントから排除される方式である。

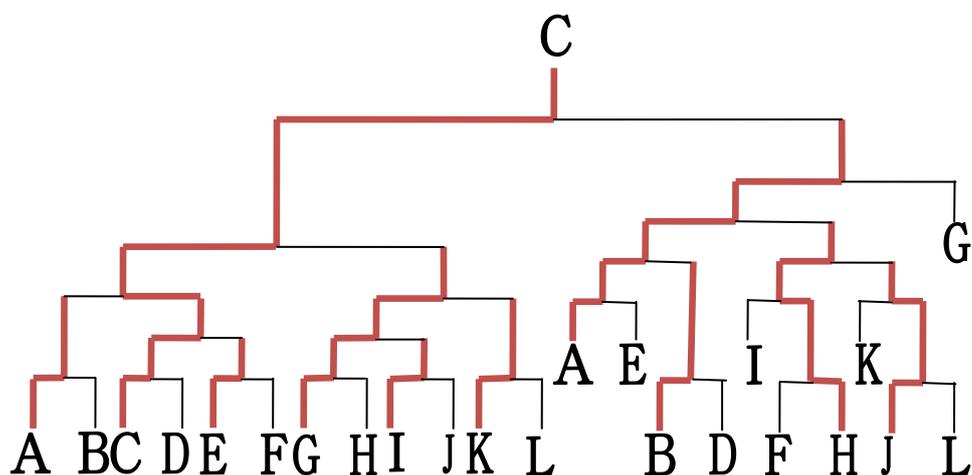


図 4) ダブルエリミネーション式トーナメントの例

図 4 がダブルエリミネーション式トーナメントの例である。1 勝すれば次に勝ち進めるケースの場合、試合数は 22 試合になり、8 日の期間を要する。1 球団の平均試合数は、2 試合になり、素朴なトーナメント同様に、年間 144 試合を行うには 72 回トーナメントを行う必要が出てくる。72 回行うには、576 日もの日数が必要になる。2 勝、3 勝したら勝ち進めるケースも同様に、640 日、624 日の日数を必要としてしまう。高校野球のように負けてしまったら、終わってしまうので緊張感のある試合は随時続くことが予想できる。しかし、トーナメント制度では、球団によって試合数が変わってしまい、1 球団 144 試合程度行うには 200 日程度では収まらないのである。以上のことから、トーナメント制度は、高校野球や WBC 等の短期でのイベント向きであることがわかった。よって、長期期間行われるプロ野球には不向きであるという結論に至った。

3-2 リーグ数の変更

現状の 2 リーグ制からのリーグ数を変更する案を次に検討したい。12 球団から考えると、2 リーグ制を抜いた、1~12 リーグ制の 11 個の案が出る。本研究では、検証するにあたり、現状の 2 リーグ制が 6 球団同士で平等の球団数で分かれていることから、各リーグが同じ球団数になる案に絞った。よって、1、3、4、6、12 リーグ制の 5 つの案を検証する。

まず 6 リーグ制と 12 リーグ制を検証する。6 リーグ制の場合、2 球団でリーグ戦をすることになってしまい、1 球団との試合が 144 試合になってしまう。日本シリーズでは、6 球団でトーナメントを実施することになってしまい、緊張感のある試合が予想できるかもしれないが、同一カードが 144 試合に対して、トーナメントでは数試合なのでバランスが悪

なくなってしまう。12リーグ制の場合は、1球団でのリーグ戦になってしまい、対戦球団がなくなってしまう。

次に3リーグ制と4リーグ制について検証する。3リーグ制では1球団との対戦数が72試合、4リーグ制では、1球団との対戦数が48試合になる。共に、本研究の条件であった1球団との対戦数24試合を超えてしまう。更に日本シリーズでも、6リーグ制と同様に、同一カードとのバランスが悪くなってしまう。

最後に1リーグ制について検証する。1リーグ制の場合、1球団との対戦数が15試合程度に納まることのできる。他の4つの案とは異なり、現状の対戦数から増えることなく、現実的である。次章で1リーグ制を適用した場合について、より詳しく検証する。

第4章 1リーグ制

1リーグ制とは、セ・リーグの6球団、パ・リーグの6球団を同一リーグとし、12球団で総当たり戦を行うものである。日本のプロ野球では2005年度から交流戦が導入されていて、交流戦を1リーグ制と仮定し論を進めていく。ここで、交流戦とは、ストライキの影響で野球離れが深刻になったことがきっかけで、1997年からアメリカで実施され、日本のプロ野球では2005年から開始された試合形式である。

交流戦は、各チームそれぞれが、他リーグの6チームと4試合ずつ行い、1ヶ月の期間で、1チームあたり計24試合実施する。勝敗や個人成績は普段のペナントレースに反映される。日本プロ野球では、2004年の球界再編問題がきっかけで導入された。各チームそれぞれが、他リーグと対戦することから、1リーグ制のような総当たり戦を行うことになる。そこで、本研究では交流戦を1リーグ制と仮定し、検証した。まず、1リーグ制と仮定した交流戦での観客動員数が、通常での試合よりも多ければ、観客動員数の増加が見込める。2009年度のデータのみだが、全試合の観客動員数を記録し、通常での試合と交流戦での観客動員数の違いを分析した。集計したデータが、図5、図6である。

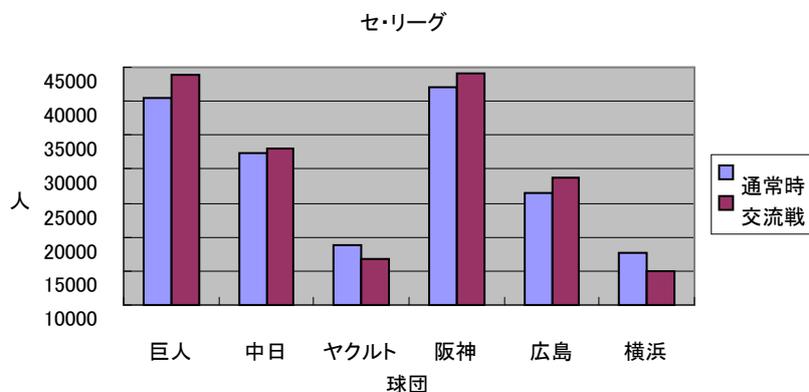


図5) 交流戦1試合当たりの平均観客動員数 (出典：産経新聞 2009年4月～10月)

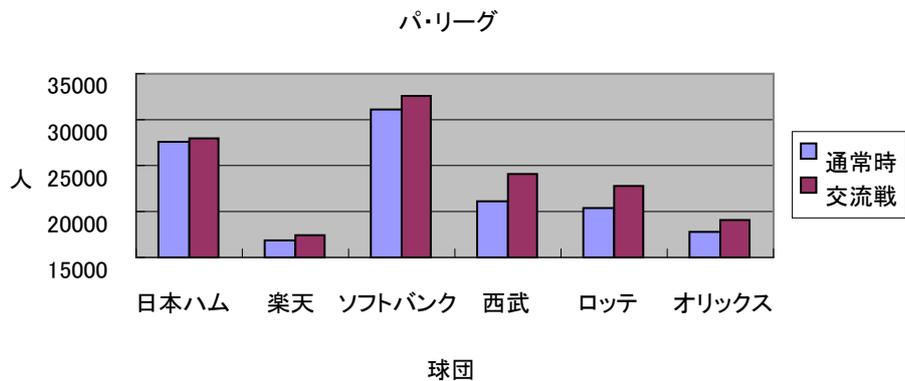


図6) 交流戦1試合当たりの平均観客動員数 (出典: 産経新聞 2009年4月~10月)

図5、図6から、8割以上の球団が、通常での試合よりも交流戦での観客動員数が、多いことがわかった。

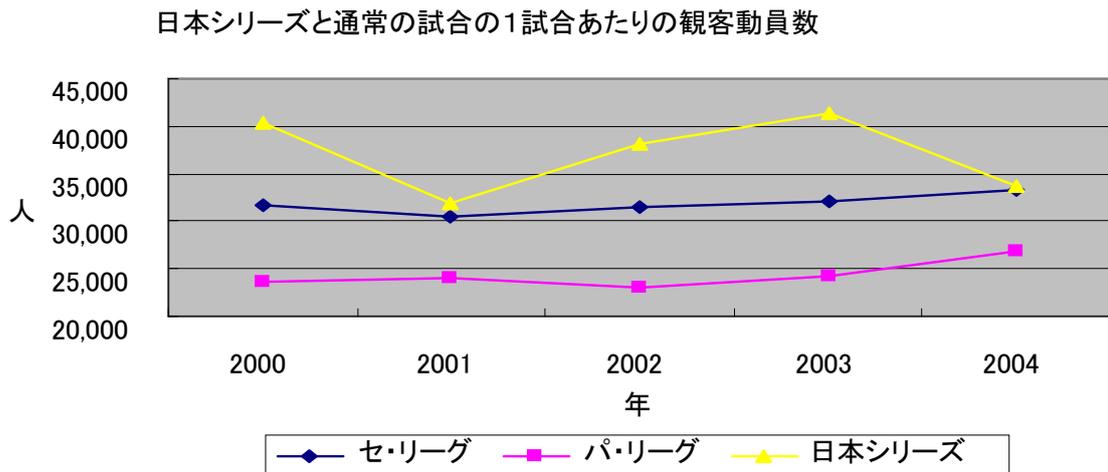


図7) 日本シリーズと通常の試合の1試合あたりの観客動員数

図7は通常の試合と日本シリーズでの1試合あたりの観客動員数の表である。図7から日本シリーズでの観客動員数は通常の試合よりも多いことがわかる。日本シリーズはトーナメント制なので、緊張感がある試合が続くため、観客動員数が多いのではないかと考えられる。1リーグ制で日本シリーズを実施するには、現在実施されているクライマックスシリーズを導入することにより、実施できるのではないかと考える。クライマックスシリーズとは、日本では2004年にパシフィックリーグで実施され、セントラルリーグでも2007年から導入された。両リーグのレギュラーシーズンの最終成績が3位以上の球団によって、トーナメントを行い日本シリーズの出場権を争うものである。1リーグ制の場合、最終成績4位以内の球団でトーナメント制度を適用することで日本シリーズが実施できる。その他、

前期、後期にわけ、前期の 1 位球団と後期の 1 位球団で日本シリーズを実施するなど、1 リーグ制にすることで様々な制度を導入できることがわかった。

第 5 章 まとめと今後の課題

本研究では、プロ野球の観客動員数という点に注目し、トーナメント制度、リーグ数の変更について論じてきた。

表 1) 本研究での評価表

案の評価観点	トーナメント	1リーグ	2リーグ	3リーグ	4リーグ	6リーグ	12リーグ
年間 144 試合	×	○	○	△	△	△	×
同一カード 24 試合以内	×	○	○	×	×	×	×
日本シリーズ	○	○	○	△	△	△	×
緊張感	○	○	○	△	△	△	×

表 1 が本研究をまとめた評価の表である。1 リーグ制を導入することが、観客動員数を増加させる案として最善であるという結論に至った。その他、トーナメント制度やリーグ数を変更した場合、多くの制度や案を提案できることがわかった。しかし、時間の都合上、他にも多くあると思われる案に関しては触れることができなかった。ビジネス面からの視点など、本研究で触れなかった観点からの評価をすること、トーナメント制度やリーグ数の変更でのたくさんの具体案を検証することを今後の課題とする。

謝辞

本研究にあたり、多くの方々から意見をいただきました。アドバイスをくださった根本先生をはじめ、根本研究室 12 期生、13 期生、OB、OG の方にはとても感謝しております。ありがとうございました。

参考文献

- [1]小林秀夫：2004 年プロ野球選手写真名鑑,日刊スポーツ出版社,2004.
- [2]浦部歩：2005 年プロ野球選手写真名鑑,日刊スポーツ出版社,2005.
- [3]浦部歩：2006 年プロ野球選手写真名鑑,日刊スポーツ出版社,2006.
- [4]浦部歩：2007 年プロ野球選手写真名鑑,日刊スポーツ出版社,2007.
- [5]浦部歩：2008 年プロ野球選手写真名鑑,日刊スポーツ出版社,2008.
- [6]浦部歩：2009 年プロ野球選手写真名鑑,日刊スポーツ出版社,2009.